

父親の子育て支援に関する研究

— 地域子育て支援センターを利用する父親を対象として —

A Study on the Fathers' Child-rearing Support: Focus on the Fathers' Use of Regional Child-rearing Support Centers

鈴木 順子

Junko SUZUKI

1. はじめに

現代の家族の形態は、核家族が主流である。核家族においては、父親と母親のみの育児が行われている。加藤（1998）の研究では、核家族のように1つの家庭において、母親以外の大人の人数が少ないほど、父親は育児に参加する傾向にあり、家族構成が与える影響について示唆している。また、島崎、田中（2007）の研究では、父親の家庭、就労状況、子育て関与と残業時間や世帯人数が増えると子育てへの関わりが少ないという報告がある。

近年、仕事と生活の調和を意味する「ワーク・ライフ・バランス」が注目を集めている。少子化政策の中で使われてきた。厚生労働省は男女共に、育児、介護など家庭を大切にしながら、充実した職業生活を営むことのできる雇用環境の整備を進めてきた。子育て世代、それも男性（父親）がターゲットとなっている。また、「平成21年度国民生活選好度調査」において「企業や事業者が実施している中で、その職場で働く人々や社会全体の幸福感を高めるとするものは何か」との問いにおいて、「仕事と生活のバランスの確保」が「給料の安定」に次いで、高い値を示している。その点を企業に期待をしていることがわかる。鹿

嶋（1993）は、「会社に尽くす仕事人間が望ましい男性の生き方とされていたが、最近、特に若い男性を中心に会社依存型人生を見直し、家庭や地域社会での活動を大切にしようとする男性が増えている。」と父親の子育て関与を述べている。しかし、福丸（1999）は、父親の経済状況や仕事中心の仕事観が関連し、母親より父親の方が子どもに対する関心や相対的価値を低くしているという結果を提出している。また、「仕事をもつ親にとって職業人や親としての役割にどのような意味を感じ、バランスをとっていくかということが実際の育児行動に関連する」とも指摘している。仕事と生活のバランスが極めて重要となっている。

実際に父親の子育ての関わりはどのような状態にあるのか。2008年の「第4回全国家庭動向調査」において、夫妻の育児分担は育児の80%以上を妻が担うケースが多数を占めており、末子年齢が低いほど、そうした傾向はより顕著にみられることが報告されている。夫の育児の関与は総じて低く、1歳未満の子どもをもちながら全く育児に関わらない夫も6.3%いた。このように父親の子どもへの育児関与は低い。しかし、「夫の育児遂行の実

態と変化」において、今回調査を前回調査と比較すると全体的に僅かながら育児遂行が増進している。希望と実際の状況には隔たりはあるが、今後は、父親の子育てへの関与は徐々に高まっていくことが予想される。

「平成18年度子育てに関する意識調査」において、「子育てをしながら孤立感を感じる時、どうすれば孤立感が軽減あるいは解消すると思うか」との問いで最も多かった母親の回答は「育児から解放されて気分転換をする時間があれば」であり、これが5割以上を占めていた。このように母親は育児から少しでも解放されたい気持ちを抱いており、父親の育児関与が必要であると考えられる。

ワーク・ライフ・バランスの推進と共に父親の育児遂行も微増しているが実際には父親の育児への関わりは少ない。母親の育児負担軽減の為にも父親の育児への関与は望ましい。では、父親の仕事中心の仕事観という父親の意識や企業における仕事と家庭が両立できる職場環境が整えば父親の育児への関与は高くなるのか。父親の育児への関与の低さはそのような要因のみに留まらないのではないか。

光田、村上（2002）の研究では、父親は子どもの出生とともに、子育て参加への義務を認識しながらも、どのように参加したらよいか、具体的な方策が分らず、悩んでいることを示した。冬木（2007）によると、父親の育児ストレスの問題が指摘されており、それは父親不在家族を解決するためのみならず、これから父親になる男性、あるいは子育て経験の浅い父親を対象とした育児支援の重要性が指摘されている。このように育児に関与はしたいがどのように子どもに接してよいかわからない父親も多く、父親が子どもと共に関与することができる場所と機会が必要となる。金山（2005）は、こどもセンターでの男性利用者の集計データを試みている。ここでは、支援

者側からみた男性の利用状況の統計を検しているが、当事者である男性の子育て支援の利用状況やニーズ調査を行う必要があると述べている。父親の子どもへの接し方や育児を学ぶ場が必要であると考えられる。現代の日本ではこのような場が少ない。本研究では父親も利用できる地域子育て支援センターに着目した。近年、父親を対象とした調査や研究は、増加傾向にある。親の子育てを支援する地域子育て支援センター利用に関する研究について、母親を対象とした研究は多いが父親を対象とした実態調査研究は未だ少ない。父親の育児支援に関する実際の具体的なデータが少なく不十分である。

本研究では、地域子育て支援センター¹⁾（以下、「センター」という）を利用している父親を対象に父親の育児状況とセンターの利用状況、ニーズを通して、具体的なデータを検討する。父親の育児への関与は未だ低い状況の中で、父親が子育てに目を向けるためには、父親の働き方における企業の取り組みだけではなく、地域の支援も必要であると考えられる。センターは母親の居場所創出の場である（松永2005）という研究にもあるように母親が利用する施設というイメージが強い。実際、本研究の調査対象施設であるN市のセンターは父親の子育て支援施設としても活用され始めている。母親の利用率が多数を占めており、母親が利用をする場というイメージが高く、父親が利用しにくい現状がある。このような状況において、センターに来所する父親は育児に関心があると考えられる。育児に関心をもつ父親にどのような支援を提供していくかが課題である。

本研究の目的は育児に関心をもち、実際に支援施設を利用している父親を対象にセンターにおいて父親が育児をする意義を考察する。そしてこれらの意義を知ることによってセンターを

通じて父親に子育て支援をすることの意味をより明確にすることである。それはどのように育児に関わればよいか苦慮している父親のひとつの指針となり、父親の子育て参加を促進する一助となるのではないかと考えられる。

2. 研究方法

(1) 調査方法

愛知県N市内のセンターに出向き、そこでの利用者に質問紙を配付、その場での記入をお願いした。配布数は150票で全数回収した。また、インタビュー調査を実施した。インタビューが可能である3名に協力を依頼し、承諾を得て、メモをとった。これにより得られた情報は学術的な目的でのみ使用することを伝えた。

(2) 調査期間

2008年10月～2009年1月

(3) 調査対象

本研究を調査する愛知県のN市は、人口増加率が全国において、上位であり、2009年8月現在においても人口、世帯数は増加している。特に、若い世代の転居者が多く、センター近くにはマンションが立ち並び多くの若年夫婦が居住している。支援拠点であるN市のセンターでは、近年、父親の来所も増加傾向にある。開所日は、月曜日から土曜日、9時から16時30分である。調査対象は、N市内のセンターにおいて、親子（父親とその子ども）で来所し、センターを利用している父親である。

(4) 調査内容

質問紙は選択技法と自由記述法の併用によっ

表1 対象者の基本的属性

人(%)

父親の年齢		来所した子どもの年齢	
20歳代後半	26 (17.8)	6ヶ月未満	11 (6.3)
30歳代前半	69 (45.8)	7ヶ月～1歳	39 (22.2)
30歳代後半	38 (25.2)	1歳～1歳6ヶ月	39 (22.2)
40歳代前半	17 (11.2)	1歳7ヶ月～2歳	27 (15.1)
		2歳1ヶ月～2歳6ヶ月	21 (11.9)
		2歳7ヶ月～2歳11ヶ月	8 (4.8)
		3歳以上	31 (17.5)
合計	150(100.0)	合計	176(100.0)
家族構成		職種	
核家族世帯	146 (97.2)	会社員	136 (90.7)
祖父母同居世帯	3 (1.9)	自営業	6 (3.7)
その他	1 (0.9)	公務員	3 (1.9)
		アルバイト	1 (0.9)
		学生	1 (0.9)
		その他	3 (1.9)
合計	150(100.0)	合計	150(100.0)
居住年数		平均労働時間	
1年以内	27 (17.8)	6時間以下	1 (0.9)
1年1ヶ月～2年	21 (14.0)	6～8時間	8 (5.6)
2年1ヶ月～3年	29 (19.6)	8～10時間	100(66.4)
3年1ヶ月～4年	23 (15.0)	10～12時間	34(22.4)
4年以上	50 (33.6)	それ以上	7 (4.7)
合計	150(100.0)	合計	150(100.0)
子どもの人数		一週間の平均的休日	
1人	115 (76.7)	1日	17 (11.3)
2人	29 (19.6)	2日	133 (88.7)
3人	6 (3.7)		
合計	150(100.0)	合計	150(100.0)

て構成した。質問項目の内容は以下の通りである。①回答者の基本的属性の内容は8項目である。表1に示した。②父親の育児に関する内容は3項目、③センター利用実態についての内容は9項目、④自由記述欄とした。インタビューでは、①対象者の基本的属性、②センター利用実態と来所する理由について尋ねた。

3. 調査結果

(1) 父親の生活実態とセンター来所との関連

1) 家庭での育児時間

平日と休日の父親の育児時間をみる。平日の父親の育児時間は、「2時間程度」が45人（29.7%）と最も多く、全体的にみると、2時間以内が9割弱を占めている。0時間を含む30分以内も46人（31.0%）であり、平日にはほとんど育児をしていないことがわかった。休日の育児時間は、30分以内は1人もいない。4時間以上が88人（58.8%）と多くみられるが、7時間以上が最も多く、51人（34.0%）となっていた。平日の父親の家事時間は0時間が最も多く62人（41.5%）、次いで、30分程度が45人（30.2%）、1時間程度が35人（23.6%）となっていた。休日の父親の家事時間は1時間程度が50人（33.3%）、2時間程度が42人（27.8%）であり、平日、休日共に家事時間は少ないことがわかる。

以上のように、平日は育児時間が少ない傾向にあるが、休日は比較的、子どもと関わっている様子うかがえる。また家事時間は平日、休日共に低いことから父親は家事よりも育児を担っていることがわかった。次は父親の育児とセンターの来所状況との関連をみる。

2) センター来所回数との関連

「センターに来所する回数」を休日の父親の育児時間でみると、休日の父親の育児時間

が4時間以上では、センターに来所する人は、月に1～4回が、125人（83.3%）を占めている。その中で7時間以上は39人（31.1%）となっていた。来所回数は父親の休日が平均週2日であることをみても、育児時間が長い人の来所回数が多い。休日は長時間の育児を担う中でセンターは家庭以外の遊び場として利用されている。このように育児を担う背景には、来所者の家族構成も関係していると考えられる。核家族世帯が多く、家庭での育児の担い手が父親と母親のみであることが多少なりとも影響しているのではないかと。育児の責任は父親にもあるという認識が父親の心中に存在しているのではないかと。

「もっと育児に参加したいか」の問いに「はい」と回答した人は、全体の128人（85.5%）であった。これを「センターに来所する回数」でみると、週に1回、来所する人の群で「はい」と回答した人は100%、月に2、3回の群では95.1%、月に1回の群では85.3%となっている。「もっと育児に参加したいと思っている父親」は、来所する回数も多い。彼らは子育てに対して積極的な父親であるといえる。次はセンターでの滞在時間との関連についてみる。

3) センターでの滞在時間との関連

センターでの滞在時間は1時間から1時間30分が全体の4割と最も多い。この滞在時間を利用年数、子どもの年齢とでみた結果が以下の通りである。

利用年数が「半年以内」の群では、滞在時間が「0～1時間」が多く57.1%となっている。「半年～1年」の群では、「1時間～1時間30分」が最も多く45.7%、「1年～2年」の群は「1時間～1時間30分」は46.7%、「2年以上」の群になると、「1時間30分以上」が最も多くなる。利用年数が高くなるほど、

滞在時間も長くなるという結果であった。

子どもの年齢と滞在時間をみると、子どもが3歳以上では、1～2時間利用している人が8割前後いる。2歳未満になると、1時間30分以内の利用が8割となっている。子どもの年齢が高くなるほど、比較的、滞在時間が長くなる傾向にある。

父親主観の回答ではあるが、「センターに遊びに来たいのは誰か」の問いにおいて、子どもの年齢でみていくと、1歳6ヶ月未満では、父親が遊びに来たい場合は43人(28.8%)、子どもが遊びに来たい場合は28人(18.6%)、父親と子どもの両方が遊びに来たい場合は、79人(52.6%)となっている。1歳7ヶ月以上になると、父親が28人(18.6%)、子どもが69人(45.8%)、両方が53人(35.6%)となっている。子どもが1歳6ヶ月未満までは、親が遊びに来たいと思っており、1歳7ヶ月以上になると、子どもが遊びに来たい割合が高くなる。子どもの年齢が高くなるほど、子どもの来所希望が高くなり、滞在時間も長くなる傾向にある。利用年数が長いと、来所する子どもの年齢も高くなり、子どもの意思でセンターに来所するため、センターでの滞在時間も長くなるという結果であった。逆に来所希望が父親の場合、一緒に来所する子どもの年齢は低いという結果もみられた。

(2) センター来所の目的について

1) 父親と子どもをつなぐ場

「父親にとってのセンターはどのような目的で来所する場所であるか(以下、「来所目的」という)」について質問した。その質問についての回答は「子どもとのんびり過ごす場」が42人(27.9%)と最も高い値を示している。センターで、子どもが遊ぶ姿をみたり、あやしたりしながら乳児である我が子と過ごす場として活用するために来所していること

がわかる。子どもとのんびり過ごすだけでなく、積極的に「子どもと関わる場」が29人(19.3%)である。「他児の様子をみる場」が18人(12.1%)、「子どもとの接し方が学べる場」は15人(10.2%)、「親子遊びや育児講座に参加する場」は9人(5.8%)であり、3割弱の父親が育児を学ぶ場として捉えている。「学ぶ」という言葉には自分の子どもから学ぶ以外に、他児とその親との関わりから、センター職員から学ぶという意味が含まれている。来所目的の3分の1弱は子どもに関して学ぶためと考えられる。

センターに「来所してよかったこと」として、「子どもが楽しんでいた」が42人(27.9%)と最も高く、「子どもと楽しく遊べた」が39人(26.2%)となっていた。子どもと楽しい時間を共有できた。「子どもの成長をみるきっかけとなった」が25人(16.4%)、「気分転換になった」が15人(10.2%)であった。「子どもとの遊び方がわかった」は9人(6.1%)、「子育ての情報を得た」は7人(4.7%)となっている。先に述べた来所目的である「子どもとのんびり過ごす場」、「子どもと関わる場」が4割強と高い値を示しており、この点に期待をして来所した人が多い。この結果と比較して「来所してよかったこと」をみると、「子どもと楽しく遊べた」、「子どもが楽しんでいた」、「子どもの成長をみるきっかけとなった」という回答が高い値を示しており、これらの回答は来所目的の意向に添っていることがうかがえる。平素、多忙な父親にとってセンターは子どもと関わり、自分の子どもの成長を感じる場として活用されていることがうかがえる。「顔見知りができた」1人(0.7%)、「親に友だちができた」3人(2.1%)は低い値を示しており、地域においての人との関わりが少ないことがわかる。この点において、支援の必要性が考えられる。

2) 父親の様々な利用形態

来所目的の結果からは毎日の生活の中で子どもとのゆっくりとした時間をもてない父親が子どもとの関わりを通じて子どもと過ごす、子どもとの関係を築く、子どもについて学ぶという視点が中心に据えられている。来所目的を「気分転換」と回答した父親は17人（11.3%）であるが、「気分転換」と父親の労働時間をみると、労働時間が8時間以上の人の約9割が「気分転換」を目的に来所している。「来所してよかったこと」の回答である「気分転換になった」では、労働時間が8時間以上で、9割強となっている。上記の質問で気分転換と回答した人は、労働時間が長い人であるといえる。「仕事とは別の場所」であるセンターという場において、子どもと遊ぶことで気分転換になっていることがわかる。仕事と家庭に関して、自分の気持ちを切り換えたいという父親の心情がくみ取れる。また、父親が子どもと初めて来所した時の子どもの年齢をみると初めての来所は1歳未満が多くみられ、7ヶ月～1歳が72人（48.2%）、6ヶ月未満が29人（19.3%）となっている。1歳未満の来所は6割強を占めていることになる。これが1歳1ヶ月～1歳6ヶ月では16人（10.8%）、2歳1ヶ月～2歳6ヶ月になると9人（6.1%）と年齢が高くなるにつれ、減少していく傾向にあった。全体的にみると比較的、月齢の早い時期からの来所が目立つ結果となっている。乳児期から子どもに関わろうという姿勢がみられた。乳児期の子どもと父親との関わりは愛情を培う大切な時期であり、その関わりを支える一助としてセンターが活用されている。

他の遊び場ではなく、調査対象のセンターを利用する理由は、「家から近いから」が6割強であった。父親は仕事が休みの日に距離的に近い場所で子どもと過ごしている。それ

はなぜか。第一に仕事が多忙ゆえ、近距離において、のんびりと過ごせる場所を望んでいる。第二に、母親と連絡し合える場所が父親にとって、利用しやすい一つの来所理由でもある。第三に父親が来所する曜日は土曜日が多い。その理由として、来所している父親の職業は会社員が136人（90.7%）と多数であり、土曜日が休みである人が多い。土曜日にはセンターで親子遊び、体育遊び、育児講座の催しを行っていることから、父親がこれらの行事に参加するために来所しているのではないか。

3) 子どもと安心して遊べる場

センターの遊び場をどのように捉えているかの質問において、「安全に遊べる場」の回答は65人（43.1%）、「遊び場が整っている」は45人（30.2%）となっている。子どもと安全で清潔な空間において玩具が整っており、子どもと安心して遊べる場所を求めている。父親と来所する子どもの年齢が低いこと、子どもの年齢が低いほど父親がセンターへの来所を希望していることから、戸外での遊び場が少ない乳児期の子どもに安全で清潔な場所で子どもと関わりたいと考えているのではないか。また、子どもの年齢が高くなるほど、滞在時間が長くなることから、幼児期の子どもにとっても安心して遊ぶことができる場所として父親が認識している。安全で安心した場所として捉えている第二の理由は、妻の存在である。父親は日常の生活の中で、子どもと遊ぶ場所に関する地域の情報を得ることは難しい。本調査ではセンターを来所した最も多いきっかけは「妻の勧めで」が約半数を超えており、次いで、「妻と来たことがあるから」が3割という結果であった。妻からセンターの遊び場を知り、子どもと遊ぶ場所として利用していることがわかる。それは母親た

ちが平素から利用しているセンターは母親が熟知している場所であり、安心して遊ぶことができる遊び場であること、子どもが母親と来所した経験があり、「安全」で「安心」した場所として妻は夫に勧奨することができるからではないか。

4. 事例紹介

ここで紹介するインタビューは支援センターで実施した。インタビューに当たっては、対象者の承諾を得て、随時メモをとった。対象者についてはセンターへの来所理由をより明確にするため、継続して来所している父親に依頼をした。

<事例1>

対象者は30歳男性、子どもは1歳8ヶ月の男児1人と妻の核家族世帯である。母親は専業主婦で月曜から金曜日の毎日、来所している。父親は土曜日にほぼ毎週、午前中に来所しており、センターを利用し始めてから1年になる。対象者の自宅はセンターに近く、徒歩で来所する。父親が来所した理由は「平日は仕事で帰宅が遅いため、子どもと関わることはできない。平日には子どもと遊ぶ機会がないので子どもとの関わり方に苦慮していたら、妻にセンターを勧められた。妻は平日、ずっと子どもと一緒にだから、自分が休みの日くらいは妻がやりたい事をさせてあげようと思っている。今では、子どもと楽しんで遊ぶことができるようになり、親子遊びにも参加している。ここでは異年齢の子どもがいるので、その中で遊んでいる我が子を見ると成長を感じる。家に帰ると妻にこうして遊んだと話をする。最近では自分の子どもと近い年くらいの親とも話すので、勉強になることが多い。」と妻への気遣いと共に子どもと過ごす時間の喜びが語られている。多忙な仕事と慌

ただしい生活の中で気づかぬ我が子の成長をのんびりとした時間の中で観察することにより、子どもの成長過程に気付くことができる。継続して利用することで来所者との関わりもみられる。センターでの子どもの様子を伝えることで妻との会話も増え、子どもに対する共通理解に繋がるのではないか。

<事例2>

対象者は31歳男性、子どもは9ヶ月の男児1人と妻の核家族世帯である。市内在住で母親は専業主婦、センターに週2、3回来所している。父親の来所は土曜日の月に2回程度、滞在時間は平均1時間30分である。センターへ来所した理由は「家の中で僕が子どもをみていても妻は子どもがぐずれば気にかかり、様子をみにくことになる。自分が子どもを連れて外に出れば、妻はその間、ゆっくりと自分の時間を過ごすことができるので来所した。まだハイハイのため、公園では遊ぶことはできないので、清潔で安心して遊べる場所があり助かっている。子どもは第1子なので他の親子の様子を見ることも勉強になるし、情報コーナーがあるので、いろいろな子育ての情報に目を通して参考にしている。」と語った。この父親はセンターは安全で安心な場所と認識している。来所している親子の様子をみることで育児を学んでいた。

<事例3>

対象者は33歳男性、子どもは3歳の男児1人と妻の核家族世帯である。センターが立地している市内の比較的近距离に居住し、母親は専業主婦で月曜から金曜日の毎日来所している。「センターには土曜日のほぼ毎週来ている。利用して2年3ヶ月だが、最初は中に入りづらかった。入っても周りが母親ばかりだったので、落ち着かなかったことを覚えて

いる。自分と子どもがセンターにいる間に妻は買い物や掃除などの家事をすることができるので来所している。自分は家事より子どもの相手をしている方が好きだし、子どもも楽しんで遊んでいるのでセンターを利用している。日頃からよく遊ぶ隣家の子どもが来所した時も親に用事がある時は自分がセンターで自分の子と一緒にみることもある。ここでの遊び時間は時計が12時になったら帰るということを子どもと2人のルールとして決めている。そうしないと、昼食に帰れないので。」と語った。家事には関心はないが、育児は積極的に行っている父親の姿がある。初めは来所することに躊躇していたが、妻への育児の援助だけでなく、子どもが遊びに来たい気持ちが来所の継続に繋がっているのではないかと。またセンターを利用して近隣との関わりがあることもうかがえた。今では子どもと遊ぶだけでなく、子どもとのルールを作り、関わりも深まっている。

インタビューでは父親の子育てや妻への心情が切実と語られていた。これらから、父親が来所する理由がより明確になった。

5. まとめと考察

本研究では、「もっと育児に参加をしたい」と考えている父親が多数みられ、実際に育児に参加をしたいと考えている父親の来所が多かった。父親はセンターにおいて子どもと過ごす、関わる、育児を学ぶことを目的に来所していた。その背景には、仕事の多忙さゆえ、平日には子どもと関わる時間が少ない父親の生活実態がある。核家族世帯が多い中で、父親は小さな子どもと接する機会がもてないまま現在に至っているケースが多い。どのように子どもと遊び、接するのかわからない現代の父親の姿がある。さらには、専業主婦における母親の育児負担が大きいといわれ、父親

の育児参加が必要不可欠となっている。それは本研究のインタビューで語られていた妻への気遣いにも示されている。こうした状況において、センターは父親の育児支援の一助として、取り組む必要がある。

父親がセンターで育児をする意義は、①もっと育児に参加したいと思っている父親に子どもと関わる機会を促進すること、②他兄やその親の様子をみることで、子どもについて学ぶこと、自分の子どもの成長を知る機会を得ること、③乳児の遊び場が少数であること、母親の勧める場所であることから安全で清潔な場所で安心して遊べること、④父親の「来所してよかったこと」で最も多い回答である「子どもが楽しんでいた」姿がみられ、「子どもと楽しく遊べた」こと、⑤育児への援助をすることにより、母親の育児の負担を軽減していること、⑥仕事以外の場において父親自身の気分転換となっていること、⑦少数ではあるが親子遊びや情報提供が育児の参考となっていることである。

センターを通して父親に子育て支援をすることは、父親が子育ての楽しさや子育てへの肯定的な感情をもつだけでなく、父親支援は母親への支援にも繋がる。母親の育児負担を軽減すると同時に母親の育児が少しでも理解でき、妻や子どもとの関わりをより深める。子どもと関わりをもつことで妻との会話も増すのではないかと。家の中で子どもと関わるだけでなく、自ら地域に出て、地域の親や子どもと関わることで子育ての楽しさや子育ての責任感を認識する機会になるのではないかと。仕事中心の父親たちにとって父親自身が「仕事とは別の場所」をもち、気持ちを切り換えることにより、仕事だけでなく、「家族」を見つめ直し、大切さを再確認することにも繋がるのではないかと。父親が子育てを積極的に行うきっかけ作りともなろう。

質問紙では「今後の子育てに必要なことは何か」について自由記述をお願いした。その結果、「企業の取り組みだけでなく、自己努力が何よりも大切である」とのコメントが多かった。父親たちはセンターに来所することで「自己努力」を実践しているのではないかと推測される。乳児期から子どもと関わることは子どもへのより深い愛情を育むことになると考えられる。センターでの関わりの中で自分の子どもの発達を理解し、学ぶこともできる。そして子育てをすることは子どもと共に父親自身の成長にも繋がる。父親の育児に対する前向きな姿勢が自由記述のコメントにも示されていた。

子育てに関心をもち始めた父親たちではあるが、松永（2005）の先行研究において、センターは母親の居場所創出の場であると述べている。センターは母親が集う場という概念がある。本研究のインタビューでも語られていた「最初には中に入りづらかった」ということば通り、ほとんどの父親にとってセンターは、母親の居場所という印象を強く感じている。その印象を転ずるには、父親の来所を促進する必要がある。調査結果で述べたように年齢が高い子どもは来所希望も高く、利用年数や滞在時間も長い。利用年数が高いと子どもが進んで父親と来所する可能性が高く、父親も通いながれたセンターにさほど違和感なく、来所する。子どもが1歳未満の乳児では父親自身の意思が来所するか否かの鍵をにぎっている。

初めての来所は1歳未満が多い。1歳未満の子どもを持つ来所者がその後も継続して来所できるかが一つの課題である。なぜ継続来所が大切であると考えられるのであろうか。第一に、利用年数が長ければ、滞在時間も長くなるという結果もあり、来所者と関わりを

もつ可能性に繋がるのが考えられる。

センターに「来所してよかったこと」として、「顔見知りが増えた」、「親に友だちができた」が低い値を示していた。インタビューにおいては、来所者間での関わりも語られていたが継続して利用している人であり、一般的には、ほとんどみられない状況である。しかし、顔見知りが増えることにより、もっと気軽に来所ができるのではないかと推測される。父親同士の交流が促進されることで父親の子育てに対する見解が広がり、それが子育てへの意欲的な参加へと繋がるのではないかと推測される。この点における支援の促進が必要であると考察する。

第二に、父親はセンターに来所することで子どもと過ごす時間を作り、子どもと関わっている。それは、子どもの成長を継続してみたい機会であり、子どもの育ちについて学ぶ機会、子どもとの関係を深めていく機会にもなる。父親はセンターを安全で安心して遊べる場であり、関わる場であると認識している。今後、父親が継続して来所するためには、センターが父親にとって身近に遊びに行く場所として浸透していくこと、子育ては母親だけのものではないことを父親が認識していくことができる支援が必要である。

二つ目の課題として、3歳未満の子どもの来所が82.8%と就園前の子どもの来所が多いことから、この時期の子どもと父親をどう支援していくかということである。具体的な支援の内容としては、①父親が興味のある講座や親子遊びの普及、②父親が来所しやすい雰囲気作りの必要性、③父親来所のキーパーソンである「妻」がより多く、利用ができるようなセンターの情報伝達の方法が望まれる。それは父親来所に繋がると考えられる。

本研究では、N市のセンターに来所する父親を対象に子育て支援のひとつの具体的な事例として検討をした。今後、父親への子育て

支援は父親自らが子育てに参加しようとする意欲を理解し、その気持ちが実際の子育てに反映するような支援のあり方が重要だと思われる。本稿ではN市のみを対象としたが、さらには、他市のセンターに來所している父親との比較検討も必要であろうかと考えられる。

注

1) 地域子育て支援拠点事業は、地域子育て支援センター事業、つどいの広場事業および児童館事業の一部を一体化して、2007年4月から新たに始まった事業である。これは、まさに子育て支援を旨とする事業であり、最も期待が大きい。基本事業内容として、子育て親子の交流の場の提供と交流の促進、子育て等に関する相談、援助の実施、地域の子育て関連情報の提供、子育ておよび子育て支援に関する講習等を全て行い、拠点を定めて実施するものとされている。

引用・参考文献

- (1) 加藤邦子（1998）「幼児期の子どもを持つ母親の生活満足度を規定する要因分析・育児支援とのかかわりを中心に」『家庭教育研究所紀要』20, 61～81頁
- (2) 島崎志歩・田中奈緒子（2007）「父親の生活実態と発達：就労・家庭状況、子育て関与との関連」『昭和女子大学生活心理研究所紀要』10, 109～117頁
- (3) 福丸由佳・無藤隆・飯長喜一郎（1999）「乳幼児期の子どもを持つ親における仕事観、子ども観：父親の育児参加との関連」『発達心理学研究』第10巻, 第3号 189～198頁
- (4) 鹿嶋敬（1993）「男の座標軸：企業社会から家庭・社会へ」岩波書店
- (5) 光田咲子・村上明美（2002）「初めての子どもを持つ父親の育児観」『母性衛生』43, 67～72頁
- (6) 金山美和子（2005）「男性の育児を促進する子育て支援の検討(2)：地域子育て支援拠点の利用状況調査から」『上田女子短期大学紀要』28, 93～100頁
- (7) 松永愛子（2005）「地域子育て支援センターの役割について一状況の多重性の中での『居場所』創出の場として一」『保育学研究』第2号 52～64頁
- (8) 冬木春子（2007）「少子化対策における『父親支援策』」『静岡大学教育学部研究報告』57, 91～105頁
- (9) 「平成21年度、国民生活選好度調査」内閣府経済社会システム
- (10) 2008年社会保障・人口問題基本調査「第4回全国家庭動向調査」国立社会保障・人口問題研究所
- (11) 「平成18年度子育てに関する意識調査」財団法人子ども未来財団